

「言葉を変え、人をつなぎ、社会を動かす」

大熊由紀子先生

このたびは、前期十五回にわたる医療福祉ジャーナリズム特論の講義を、本当にありがとうございました。

最終回の講義を聞いて、これまでの授業で学んださまざまな内容が、「言葉を変えること」「人と人をつなぐこと」「社会を実際に動かすこと」という三つの柱で結ばれていると気づきました。ジャーナリズムとアカデミズムには、事実を発見し、論理的に伝えるという共通点があります。しかし、ジャーナリズムには、それを人の心に届く言葉に変え、社会に影響を与える役割もあるというお話が、特に印象に残りました。

「抑制」を「縛る」と書くこと、「徘徊」という言葉の裏にある本人なりの理由を見ること、「国民負担率」を「国民支え合い率」と捉え直すことなどから、言葉は単に現実を説明するものではなく、現実の見え方や人への対応そのものを変える力を持つと学びました。専門的で中立的に見える言葉でも、本人の痛みや権利を見えにくくする場合があります。そのため、言葉を選ぶ時には、「この表現によって誰が主体になり、誰が対象にされるのか」を考える必要があると思いました。

また、鷹巣町の福祉改革、盲ろう者支援、ぐるんとびー、オープンダイアログ、ユニバーサルデザイン、ユマニチュードなどの実践から、優れた制度やケアは、専門家一人の力だけでは生まれないことも学びました。当事者、家族、医療・福祉職、行政、研究者、ジャーナリストなど、異なる立場の人々が出会い、対話し、支え合うことで、初めて社会の仕組みが変わっていくのだと思います。先生が長年続

けてこられた「えにしを結ぶ」という活動も、人と人を結ぶこと自体が社会を変える実践であると感じました。

私の研究では、日中の終末期がん医療における告知対象の違いを扱っています。今回の講義を通して、「終末期」「告知対象」という自分が何気なく使ってきた言葉についても、改めて考える必要があると感じました。患者を情報の受け手として見るのではなく、人生の最終章を生き、意思決定に参加する主体として捉えることが重要です。また、日本と中国の制度を比較するだけでなく、医師、家族、患者の間で実際にどのような対話や調整が行われ、誰の声が見えなくなっているのかを明らかにしたいと思います。

この授業から、社会を変えるためには、正しい知識だけでなく、権力に向き合う度胸、人を引きつける愛嬌、重い問題の中でも人間らしさを失わないユーモア、そして他者の立場を考える想像力が必要だと学びました。修士課程の最初の学期に、このような考え方に触れられたことは、今後の研究や生活にとって大きな財産になると思います。

これからも、見えにくい問題を見えるようにし、聞こえにくい声を社会に届けるために、自分にできることを考え続けたいと思います。十五回の貴重な講義と、多くの出会いを与えてくださり、心より感謝申し上げます。

ゴウ ショウ